

企業の買収には緊張感

——会計基準は買収などの企業活動に大きな影響を与えるところです。花王は2016年1～3月期からIFRSを自主的に使う方針を発表しています。理由は何か。

「投資に使ったお金に対してどの程度の利益を上げたかをみるEVA（経済付加価値）という経営指標を、当社は1999年から使っている。この指標はIFRSの考え方と整合性がとれる。例えば企業買収の時に発生する『のれん』の扱いだ」

「『のれん』は企業の純資産額より高く買収した部分だが、日本の会計基準では毎年一定金額を経費として落とさなければならぬ。この償却とよばれる手続きがIFRSやEVAにはない」

——償却の負担がないため、IFRSは安易な買収を増やすとの批判もあります。

「逆に買収した事業の競争力が落ち『のれん』の価値が大きくなると判断した場

合には、損失を一気に落とす（減損）。確かにこのほうが企業を買収しやすくなるという議論はある。しかし企業にとっては、減損を避けるためにどうやって事業の価値を高めるかという緊張感のほうが強い」

——「のれん」のほかにも、

日本基準とIFRSでは異なる点があります。花王の場合、特に問題となったのは何でしょうか。

「例えば研究開発に要するコストだ。そうした費用をIFRSでは経費ではなく、資産として計上することもできる。しかし、じっくり検討し

た結果、われわれは経費とみることにした。投資家から比較されることの多い欧州の競合会社も費用に計上している場合が多い。投資家により正確に比べやすい」

「また数字だけでなく、数字を計算する根拠や背景などを財務諸表の欄外などで説明

する必要もある。為替相場の動きに対して業績がどのように変化するかといった説明も求められる」

「本業の経営成績を示すと考えられていた、営業損益の表示も大きく変わる。これまで営業外損益や特別損益に計上していた多くの部分が営業損益に入るからだ。ある程度の混乱も予想される。我々はIFRSの営業損益だけでなく、一時発生利益や費用を除いたものも開示するといった工夫も検討している」

——IFRSは株価や為替の変動によって決算情報が大きく変わるようになるとされます。経営が短期志向になる懸念はありませんか。

「IFRSは一般に時価主義の要素が強い。だから、期末の時価を確認して、なおかつ短い時間で決算を固める作業をしなければならぬ。期末の時価情報は重要だが、決算の発表時には過去の情報に

なっている。経営にとって重要なのは先を見通すことだ。過去情報に基づき、今後のことに説明責任を持つ必要がある。過去の時価情報にこだわりのすぎるのは良くない」

——IFRS導入に向け、どのような段階を踏みましたか。また、実際に基準を使う立場になって、何か注文や意見はありますか。

「09年に社内勉強会を立ち上げた。次に12年から決算期を変更し、12月期に統一した。13年度からは減価償却の方法を定率法から定額法に変え、14年にはシステム対応も終わり、ようやく導入の環境が整った」

「IFRSは業種の特性はあまり考えず、一律の会計処理を求める傾向が強い。これを痛感したのは売上高の会計処理。製品を出荷した段階で売り上げとする日本式の出荷基準から、荷物が届いたことの確認を要する検収基準に変

えた」

「大きなプラントをつくらせて遠隔地に時間をかけて届けようという企業にとっては出荷基準と検収基準の違いは大きい。当社のように当日や翌日には製品を届けている企業は、両基準の違いが実質的にはない。それでも社内の文書を変更する必要もあった。これはもっと簡便にならないものか」

——欧州と異なり日本ではIFRS使用を義務づける、強制適用が始まっています。近い将来の強制適用を予想していますか。

「確かに日本では任意適用の段階だが、わが国の会計基準を国際的なものに近づけていく動きを考えれば、当社もその先頭集団に入りたいという気持ちはあった。将来、任意が強制になるかもしれない。早いうちにチャレンジしておけば、その後の対応も楽になると考えている」

花王執行役員

青木 和義氏



あおき・かずよし 横浜国大卒。79年に花王に入社してからは会計・財務畑が長い。中国拠点の副総経理も経験。59歳。

利益開示、混乱回避へ工夫